



安城市議会議員 石川つばさ通信 号外

市政レポート

新社会党

第22回定期全国大会

新社会党は4月22・23両日に東京都内で第22回定期全国大会を行いました。詳細は本紙の1~4ページに譲るとして、ここでは私の印象に残ったことを記したいと思います。

一つ目は、野党共闘を反映し、各党より連帯の挨拶や祝電が寄せられました。過去の党大会においても来賓として他党の国会議員が挨拶されることはありましたが、今回ほど広がりを見た大会はこれまでありませんでした。生憎、私自身が初日のみの参加だったため全ての挨拶を聞くことはできませんでしたが、大きな前進であると思います。

二つ目には、大会の中で基調講演が設けられ、原発問題の専門家・小出裕章氏が熱弁を振るわれたことです。原発事故から丸6年以上が経過しても目途の立たない原発の恐ろしさが改めて浮き彫りになりました。以下、太字でその概要を記します。

「**1954年**、原子力にかけた幻の夢。当時の新聞は各紙同じような論調だった。私も信じてしまった。**1954年7月2日**毎日新聞の一節を紹介したい。

『原子力を潜在電力として考えると、まったくもってとてつもないものである。しかも石炭などの資源が今後、地球上から次第になくなっていくことを思えば、このエネルギーの持つ威力は人類生存に不可欠なものと言って良いだろう。(中略)電気料は二千分の一になる。(中略)原子力発電には火力発電の様に大工場としない、大煙突も貯炭場もいらない。また毎日石炭を運び込み、たきがらを捨てるための鉄道もトラックもいらない。密閉式のガスタービンが利用できれば、ボイラーの水すらいらないのである。もちろん山間へき地を選ぶこともない。ビルディングの地下室が発電所ということになる。』

殆ど嘘ばかりとお気づきだろう。原子力も単に湯を沸かす仕組みにすぎない。石炭は確認埋蔵量だけで**60~70年**はもつ計算、究極埋蔵量ならその**10倍以上**。原子力は、

他のエネルギー枯渇を前提に話が進められていたが、枯渇までは相当時間あり、むしろウランの方がはるかに埋蔵量が少ない。電気量 2000 分の 1 との宣伝は嘘。

原発は出力調整ができない。夜中でも発電し続ける。余ったらどう処理するか、、、？水力発電の水の汲みあげに回されている。これで 3 割の電力が消失。揚水式水力発電はべらぼうに高い。それを原発に織り込むと、火力よりも高い金額になる。

放射線量に強いロボットを作ろうとしてもまだできない。火力発電所なら火事になっても鎮火すれば中に入り原因を調べられる。だが原発はそうはいかない。中に入れないし鎮圧めども立たない、被曝労働も続く。遠からず、汚染水を海に流すだろう。原子力緊急事態宣言は未だ解除されていないし、今後いつまで続くかもわからない。

1 平米あたり四万ベクレルを超えると、放射能の実験区域から出られない。実験室の扉が開かないことになっている。実験室は飲食や睡眠、排便も禁止している。扉を開けるには実験着も破棄し、基準を下回ることが求められる。その基準をはるかに超える汚染が広がっている。政府は、そんなどうしようもない土地に被災者を捨てている。汚染の分布図は日本国政府自身が示している。

これまで原発で出してきた核のゴミは広島原爆 120～130 万発分。国民 100 人で原爆一発を処理しなければならない数である。」



講演後、小出裕章氏と共に

講演の中で出てきた「原子力緊急事態宣言」ですが、現在も発令中であることを多くの人は意識していないのが実情です。悪い意味での“慣れ”なのかもしれませんが、非日常に慣れて、それを日常であるかの如く錯覚したとしても危険度が軽減されるわけではありません。100 人で原爆一発をどう処理するのか、現に起きてしまった問題に対して正面から向き合うほかありません。

そんな原子力緊急事態宣言の解除もできない状況下、国は原発再稼働を進めており、昨今の判決を見るに三権分立が実現しているのかも疑わしい情勢です。福島をどうするか、その答えも見いだせない中で第二の事故を引き起こしかねない再稼働は到底、容認できるものではありません。

石川翼事務所 446-0072 安城市住吉町荒曾根 1-245 アワーズビル 2F 南
電話 0566-98-6932 メール ishikawa2011@aria.ocn.ne.jp

編集：石川つばさを支援する会